

◎まとめ 「貴重な体験ができました」で終わらせない

参加体験型の学習を終えた後に生徒に感想を聞くと、「貴重な体験ができてよかったです」ばかりが並んでしまい、生徒が学習を通して何を感じ、何を学び取ったのかわからない、なんてことはないでしょうか。授業を実施するにあたっては、「ねらい」があり、生徒に気づいたり考えたりしてほしいことやメッセージが教師側にはあったはずですが、しかし、生徒たちはこちらの意図していたことについて、深く考えたり、何かを学び取ったりしてくれたのだろうか、疑問が残ったりも寂然としない、といった経験です。

参加体験型の学習における学習活動、つまり「体験」は、あくまでもねらいを達成するための過程や手法にすぎません。生徒たちの学習活動を単なる体験で終わらせないためには、最後の仕上げ「まとめ」の時間がとても大切です。「まとめ」は生徒たちが体験から感じたことを深め、直接学習活動で取り上げた課題以外の問題に直面したときにも応用の効く、「学び」へと変化させるための時間です。

「まとめ」は次の2つの要素を持ちます。

- 各自の体験を報告し合い、達成感を味わう
- 各自が体験から気づいたことを深め、わかちあうことで、「体験」を「学び」へと変える

1. 学習活動の成果を報告する

各自の体験を報告し合う場として、成果発表会を行うことが多いでしょう。成果の発表の仕方を、さまざまな形で演出すると、発表に至るまでの学習が活発化し、より実感をともなった体験ができ、より多くのことに気づいたり、深く考えたりすることができるでしょう。発表会では、生徒が互いに「聞き合う」姿勢を育て、一方で、発表を励まし学習活動やその成果をたたえ、生徒に達成感を持たせることも大切です。

たとえば

「番組づくり」

グループ活動で得た成果を制限時間内の番組にまとめる。

「代表者会議」

班内で二人組をつくり、他の班から来た二人組と「代表者会議」用の新しい班をつくる。生徒全員がもつた班の代表者として、それぞれの「代表者会議」用の班で成果発表を行い、考えを互いに話し合う。

「〇〇展覧会」

できた作品を並べ、数分内に自由に見て歩く。作品に出展カードをつけると、視点が定まる。

2. 「体験」を「学び」へと変える

学習活動で体験したことや、体験を通して気づいたことを深め、そこから何かを学び取るには、ゆったりとした静かな時間を用意することが大切です。学習活動の報告が「動」なら、こちらは「静」の時間でしょう。

体験の共有をもとに、自分自身が気づいたり感じたりしたことをまず、一人で静かにふりかえります。この過程で気づいたことを深め、何かを学び取る生徒もいるでしょう。そして、それをほかの人たちに話し聞き合うことで自分が体験から学び取ったことを確認し、友達の考えが刺激となり、生徒はさらに考えを深めることができます。

ちょっと一工夫。グループ活動、1人で1クラス全部はともに見切れない！！ という時には

思い切って複数のクラスによる合同授業にしてみましょう。2クラス合同なら、少なくとも2人の教師で生徒の学習活動をサポートすることになります。授業の準備や進行も分担でき、生徒への視点も増えて、一石二鳥です。

(横浜雙葉中学高等学校 小杉慶子)

第2章

都市緑地を使った環境学習プラン

新宿御苑編

都会に残された緑地や公園、校庭など、普段は見過ごされがちな自然にも環境を学ぶ素材がたくさんあります。

その事例として、東京・新宿にある「新宿御苑」をフィールドにした学習プログラムを紹介します。